

# ふるさと探訪

## 【其の三十三】

### 信夫山散歩(二)

福島の狐の話といえば、鎌田の加茂左衛門、一盃森の長次郎とともに、御山のごんぼうは、信夫の三ぎつねといわれ、人々の間で親しみをこめて語り伝えられています。

まずは、御山のごんぼう狐のお話を一つ。

(中略) 加茂左衛門は、毎日のように魚とりにでかけました。頭がいいせい、魚とりはうまいのです。山生まれのごんぼうは、悲しいかな、大すきな魚をとる方法を知らないのです。だから、ときどき福島の町へ行って、木の葉で魚を買って来ては、化けの皮をはがされたりして失敗していました。ごんぼうは大へん気がいいので、魚とりのことを加茂左衛門にききました。すると、「それはな、寒い寒い冬の夜に、信夫山の麓にある黒沼にいて、尻尾を入れておくのだよ、そうしてしばらくまっていれば、二百匹ぐらい取るにちがいない。」

さっそくごんぼううぎつねは、黒沼にいて氷がガラスのようにはりつめたところで、コツコツと小さい穴を掘りました。そして、しつぽをいれました。夜がふけて寒くなりますと、だんだん穴の水が氷つて尻尾が重くなってきました。うまいぐあいに魚がたんとかかったと思って

千もついたか こんこん  
万もついたか こんこん

きつねは、そういつて喜んでいました。そのうちに東の空が明るくなってきました。もうこれ位ならよかるうと思つて尻尾をひっぱりました。ところが、何としても氷りついた尻尾はぬけるはずがありません。ごんぼううぎつねは俄に顔色を変えて、

「加茂左衛門にばかされた。」

近くの人たちはこれをみつけて大喜びです。生け捕るうとしてやってきました。驚いたごんぼうは最後の力をふりしぼつて、

ぬけば ぬける

お山の ごんぼう

なんとかわいそうに、お山のごんぼうは、魔法の尻尾をなくしてしまいました。この時からごんぼううぎつねはゴンボぎつねになったのです。

《片平幸三編『福島の民話』しのぶぎつねより》

なぜ、信夫山のこの狐を「ごんぼう狐」と呼ぶのか不思議に思われることでしょう。それはこの信夫山が、古代より信仰の山と仰がれ、神聖な「御山」とされてきたことに由来するようです。出羽の羽黒神社とのゆかりを伝える中峰の羽黒神社は、古くは羽黒大権現といわれ、信達地方一帯の総鎮守として信仰をあつめてきた神社です。出土品から、その信仰は平安時代までさかのぼり、別当真言宗寂光寺の勢力は、遠く会津地方にも及んだ記録があります。その中

に、「信夫羽黒山別当治部卿僧都御房」と明記してあり、御房は御坊の意であるから「御坊狐」となったのであろうと説いています。(『覆刻版信夫山』梅宮茂著) また、柳田国男は『爐辺叢書』に「行者の別称たる御坊の訛音かも知れぬ」と指摘しています。

しつぽをなくした御坊狐は、神通力を失つてしまい、羽黒山寂光寺御坊に教えられ、人をばかなくなりしました。当時、蚕を食いあらずみをとる猫は、養蚕の神として信仰されました。御坊狐はその猫のように、農民に益する神の使いとなり、「ねこ稲荷」に祀られたといえます。これが「西坂稲荷祠」で、「信達一統志」杉妻莊の中にも見えます。

#### 参考文献

- 『覆刻版信夫山』 梅宮茂著 蒼樹出版
- 『福島の民話』 片平幸三著 未来社
- 『福島市史』別巻4 福島の民俗2
- 『信達一統志』 福島市史資料叢書第三十輯
- 『信夫山めぐり』 梅宮茂著 信楽社
- 『會津塔寺八幡宮長帳』 是澤恭三編
- 『信夫山散策』 史跡探訪編 魅力ある福島をめざす会編・発行
- 『信夫山日曜散歩』 入道正著 ナカガワ発行

「地域資料チーム 菅野由美」

\*1 ゴンボとは、このあたりの方言で尻尾の短いこと。

\*2 権現とは、仏が神となつてかりにあらわれたもの。本地垂迹説による。

\*3 別当寺とは、神仏習合説に基づいて神社に設けられた神宮寺の一。

\*4 重要文化財『會津塔寺八幡宮長帳』

